

宮沢賢治

その文学と宗教

山田野理夫



潮文社

宮沢賢治

その文学と宗教

山田野理夫

宮沢賢治〈新装版〉

山田 野理夫 (やまだ のりお)

1992年仙台生。東北大学で古田長一教授のもとに農業史専攻。宮城県史編纂委員。

主著 小説「南部牛追唄」(第六回農民文学賞)・「柳田国男の光と影—佐々木喜善伝」・「荒城の月—土井晩翠と滝廉太郎」他。

日本文芸家協会、現代詩人会所属。

平成8年5月31日発行

著 者 山 田 野理夫

発行者 小 島 米 雄

印刷所 井 上 印 刷

発行所 千 162
東京都新宿区市谷田町 2-31 株式会社 潮 文 社
電話東京 (3267) 7181 (代表)
振 替 00140-7-69107

© Norio Yamada 1969 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえします

ISBN 4-8063-1297-5

(越後堂製本)

目次

第一章	誕生・小中学校時代……………	五
第二章	盛岡高等農林学校時代……………	三〇
第三章	挽歌……………	五九
第四章	春と修羅……………	一〇〇
第五章	羅須地人協会時代……………	一五五
第六章	東北砕石工場時代……………	三二
終章	わかれ……………	三三
宮沢賢治年譜……………		三七
あとがき……………		三六

第一章 誕生・小中学校時代

宮沢賢治は明治二十九年八月一日に生れた。これは戸籍の記載であるが、事實は八月二十七日であるという。届出が九月に入って行われ、旧暦の日付にしたというのである。こうした例は東北地方によく見られることである。父政次郎二十三歳、母イチ二十歳の長子、宮沢家は祖父の代から古着商兼質屋を営んでいた。岩手県稗貫郡花巻町川口町である。これも東北の風習で賢治は母の実家^{きと}で生れた。この家は花巻の鍛冶^{かじ}町で宮沢家から歩いて十五分に過ぎない。賢治の生れた折、政次郎は関西に古着の仕入に赴き留守であった。貧しい町と村に住む農民が客であつてみれば古着の需要は多かつた。村の者が店に来て持参のにぎりめしを使つていったという。筆者^{わたくし}も幼年時を仙台から一里ばかりの荒浜という漁村で過したが、いつも着るものは古着で、それはへんな臭いがしたものである。避病院からの払下げで、消毒液であることを後年識つたものである。

△賢治さんは、「妹が胸の病気で死んだのも、たしかに、そういう商売をして感染したものだと思います」と、言っていた△（森莊己池）

と、賢治はこの商売を嫌っていた。店があまりにも暗い感じがしていたからである。

この祖父の代からの家業が明るい金物屋に変わったのは大正十五年からである。

賢治の幼年時代を身近に識っているのは、トシ（明治三十一年十一月五日生）、シゲ（明治三十四年六月十八日生）、清六（明治三十七年四月一日生）、クニ（明治四十年三月四日生）の弟妹達なのだが、その清六さんに「幼時の記憶」の一文がある。筆者は賢治と会う機会は無かったが、賢治の二十回忌で清六さんにおめにかかった。そのとき筆者は賢治の風貌を清六さんの姿から見出したものである。

△兄は表面陽気に見えたところもありましたが、ほんとうは小さい時から何とも言えないほど哀しいものを持っていたと思います。父が時々話したのですが「賢治には前生に永い間、諸国を巡礼して歩いた宿習があつて、小さい時から大人になるまでどうしてもその癖がとれなかったものだ。」というようなところがあつたと思います△

この一文が賢治の生涯を表わすものとして適切であろう。その姿は猫背でうつむいた破れ衣に身をつつんだ行脚僧の姿ではなからうか。前生という政次郎の仏教観も窺われるというもの

である。

ハ実際わたくし（清六）はそんなに幼なかった頃に、兄や亡くなった姉達と一緒に、寒いところを永い間苦しみながら遙かな諸国を巡りあるいたことがあった様な気がして仕方がなかったのです。そして今生でも同じようなことが起るような予感と、兄や姉が私共を置いてその中にどこかに急に飛んで行ってしまふのではないかと思つたのでした。ですから、そのような予感がだんだん本当になつて行くのは苦しいことでありました。

これは清六さんが自分自身のさびしさを語っているのだが、東北の風景のさびしさでもある。そのさびしい風景には人工的と自然的なものの二つがある。そこから生れて来たのが民話と仏教と寓話である。後年賢治は佐々木喜善と会っているが、この「聴耳草紙」の編者と共通するところがある。賢治は明治三十六年花巻川口尋常高等小学校に入学、四年制であつたのが、賢治の卒業の年に六年制に改められ、賢治はそのまま進学した。賢治の小学校時代影響を受けた教師に八木英三がいる。三年生の時の担任である。この若い教師は童話を授業時間に生徒達に聴かせたそうである。賢治は寺僧からは仏教講話を聴き、それらが子守唄となつていったのである。

ハ冬の寒い夜に菩提寺だった安浄寺での報恩講を思い出すことはなつかしいことで、その頃私はまだ小学校にはいっていなかったでしょう。お寺にはたくさんの子どもたちが集まつて

まっ白な餅せんべいに太い縫針を打ちつけて、その針についた糸を静かに引き上げて遊ぶ「せんべい刺し」や坐ってとる「ねまり相撲」などをやっていたが、おつとめの鐘が鳴り出しますとみんなしんとして本堂に向かって坐ったものです。中でも兄は餅の着物などを着てちゃんとながく坐っていたものですが、私は間もなくねむくなってきて、読経が林の中の蟬時雨のように聞こえたり、太い絵蠟燭の焰が次々とのびたり縮んだり、やがてそれがぼんやり霞んでしまうのでした。そして夢のように老僧の説教を聞いたと思いますV

幼い頃の東北の子どもたちの集会場は寺を主としている。賢治は寺の絵蠟燭と寺僧の語る仏教寓話と、父の語る昔がたりと、童話好きの教師と、そして古着屋兼質屋という家業と凶作と日でりとさびしい風景と、その中で生育していったのである。

△いつともなく人の世のかなしさという風なものが私どもの身にしみこんだように思いますV

筆者は賢治の幼年期を重視しているので、花巻川口尋常高等小学校（花城町）の建物を観たことと訪ねたことがある。現在その一部が花巻市役所になっている。賢治の学んだ教室も残されている。

△私の組で一番は佐藤金治、二番は宮沢賢治、三番は小田島秀治であった。この順位は私の

受持を通じて変らず、秘かに「秀才三治」とよんでゐた。金治と賢治とは共に花巻豊沢町の素封家の息子で、家は一軒おいて隣りあってゐた。二人は学業に於て甲乙の差は殆んどなかったが、金治は文字に勝れ、賢治は文章に勝れてゐた。小学校では綴方よりは習字の方に点数が重くかかった。一番と二番との差はそこでついた様に思つてゐるV

これは教師八木英三の後年の一文である。金治は早大、秀治は東北大医学部へとすすむが、ともに花巻の素封家の子である。貧しい家の子は成績が悪い。勿論例外もあるが。夢見る青年教師も賢治が素封家の生れであるといっている。

△私の前のこの組の担任は寺小屋の師匠「吹張先生」であつたが、どのような教授をしたものが五十余人の児童の教室内の騒々しさは言語に絶するものがあつた。これを鎮める為に鉄拳の無効であることを知った私は、アンデルセンと早変りした。そして先づ語りはじめたのは五来素川訳すところの「まだ見ぬ親」であつた。この一篇を語り終るのにやや半歳を要したかと記憶する。少年であつた自分自らが童話の中に融け合つて話すので、その時ばかりは教室は全く水を打った様な静さで、所々にススリ泣きが聞えることも少くなかつたV

八木教師はまだ十八歳だったのである。この人は早大の編入試験に合格、花巻を去っている。小学校時代の賢治の綴方が残っている。

害虫

宮沢賢治

拝啓、御尋下されし、害虫駆除法はせんだって読本にて読み候に付御答申上候。害虫の種類も一樣ならず候へば私の知ってゐる三四種類を御答申候。

螟虫は稲の害虫にて蛾と成りし頃燈火を田におきてさそひ殺すべく、浮塵子は水田に石油をそそぎて、ふるい落して殺すべく候。又夜盗虫は畑のまわりにみぞを作りその所々は穴を堀りおき夜此虫のはいまはって穴に落ち集った所を殺し、ありまきは石油にしゃぼんをまぜたるものやたばこのしるにがい汁などかけて殺すがよろしく候。

なお又駆除法は共同一致いたしてなさずは効果少く候（明治四十一年川口小学校六年生）

賢治は「農業書」からでも知識を得たものであろうか。

私の教室

私等の教室は学校の中の平屋造の一番東の教室の次であります。

この教室の外五つは火事の時焼残ったものであります。教室の坪数は二十坪でその中に七十幾人の人が毎日来て習ってをります。教室の中には私等の机とこしかけと黒板二つと教だんとテーブルがおいてあります。この教室は式のあるときはいつも式場になって御真影を於くところがありますからその度にここのしきりをはづしたりなどします。(明治四十一年・六年生。堀尾注・は先生のつけた朱点)

冬季休業の一日

二月四日のことなりき。

我は父に回章をまはすことなど云いつけられぬ。

於田屋町をまはして鍛冶町に行かんが為上町を通りしに杉本にぶち犬をきすかけられて恐ろしかりき。

鍛冶町をまはしてより向花巻をまはして家に帰れり。

それより上町のいところに行きて遊びたり。

夜店の用紙をおこして手つだへり(明治四十二年二月、堀尾注・は先生の朱点)

盛岡中学校は盛岡市内丸にあった。賢治は明治四十二年四月入学した。十三歳である。盛岡中学は明治十三年開校、四百五十余名の受験生があったが、賢治は、百三十四名の合格者の中に入っている。寄宿舎の寮に入る。

へさて、私と九歳も歳の違っていた兄は、この頃家から十里も北の盛岡中学校の寄宿舎に入ったばかりで、時々休みで家に帰って来ますと、私達の遊びは全然別なものになったものでした。

兄はさまざまの色の鉱石を集めて持って来たこともありましたし、また珍しい色々の植物を押し葉にして来たり、年の根石や貝石などを小さきままの箱に入れ持って来て、その説明をしてくれたりもしたものです。

私共はこれらの大切な宝物を陶磁の甕に入れて、土の中に埋めて遊んだこともありましたが、昆虫の死骸を土に埋めて墓をたてたりも致しました。また或時は顕微鏡で色々なものを覗いて見せたこともありますし、盛岡附近の山のはなしを面白く聞かせてくれたりもするのでした。ですから兄が休暇で帰って来れば、もう日は短かすぎる程で、長い日というものは無くなるのでした。

兄が星座に夢中になったのも其頃のことと思いますが、夕方から屋根に登ったきりで、いつまで経っても下りて来ないようなことが多くなって来ました。丸いボール紙で作られた星座図を兄はこの頃見ていたものですが、それはまっ黒い天空にいっぱい白い星座が印刷されていて、ぐるぐる廻せばその晩の星の位置がわかるようになっていたものでした。

兄は私に星の名前を教えようと思いましたし、星の伝説なども話してくれました。また、私達は毎日地球という乗物に乗っていつも銀河の中を旅行しているのだというようなことや天文上のはなしや、自分の考えなども話してくれたのですが、難しくて、幼い私にはよくわからなかったのですV（清六・「虫と星と」）

盛岡中学校に学ぶ賢治は、それまで父の、若い教師の、寺僧の語った幻談に、事実の知識をもって接することになった。それに英語も加わった。博物もある。当時賢治のいる寄宿舎はランプを使っていた。生徒達がその掃除をするのだが、賢治は自分からさきに立って、ランプ掃除するような生徒であったV（阿部千一）という。これは賢治の折目正しさを示すことであったが、賢治はランプ掃除をすることがたのしみであったのではなからうか。すすを払って明るくなるランプにいろいろ空想が出来るからである。これは漁村に育った筆者のことでもあったが。

いま筆者は岩手大学構内に立っている。風が冷たくつよい。岩手山がくっきり見える。南部富士ともいう。ここ盛岡のシンボルはこの岩手山である。賢治がこの岩手山に植物採集のために登ったのは、明治四十三年六月十八日である。二年生約八十名が山県教諭に引率されていた。

へそれにしても、ふしぎでならなかったのは、あの初登山の際における賢治のさっそうたる健脚ぶりであった。ふだんは、色のなまっ白い、へなへなの坊ちゃん、体操の時間などは、クラス中で一番の劣等者だった彼が、一度山に組みつくと、まるで別人のような勇者であり、英雄であったのである。三合目辺でへたばってしまった私を後にのこして、「おれは先にゆくから、ゆっくりこいよ」と言い捨てたまま、石ころの急坂を、ましろの如く登ってゆく彼の雄々しい後姿を、私は恨めしそうに見送っていた。賢治のへなへなな身体の一体どこからあんなしぶとい力が湧いてくるのか、私には全く謎であった（阿部孝）

賢治は体操の時間になると、軍人あがりの教師のなぶりものになるのだ。鉄棒、木馬、器械体操などは全く駄目で、ボールを投げるかっこうは女の子そっくりだったという。その賢治は岩手山登山で見違えるばかりの雄姿を見せたのである。賢治は運動神経が鈍かったが、歩くことは平気なのである。歩くということは運動神経とはかわりがない。賢治は目的を達するこ